

ワークショップ

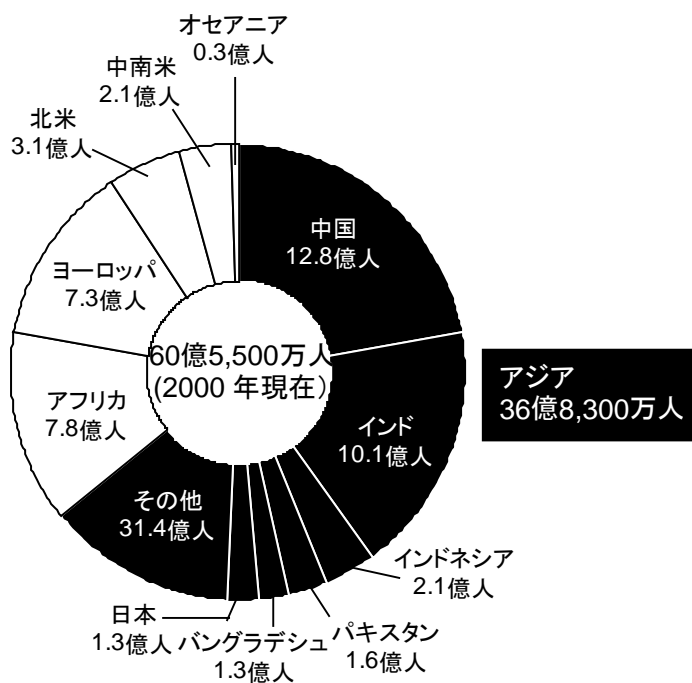
『 暮らしの未来像 』

－ 如何に暮らすか、如何に生きるか －

黒坂三和子、藤崎理恵

地球と人間の安全保障と日本の役割

21世紀における人類の崇高な目標は、紛争や戦争を未然に防ぐための努力であり、南の人々が生活水準を向上できるように支援する国際協力であり、約60億の人々の生存を支える地球の自然資源と環境を保全し回復することだといわれます。20世紀を人間が自然を無限と考えて過剰消費した時代とすれば、今世紀は地球生態系の量と質の限界を考慮した生活様式や経済活動を行う時代ではないでしょうか。今世紀の最初の世代である私たちは、また、もしかすると地球規模の生態系への大規模で不可逆的な損傷を回避する可能性をもつ最後の世代となるかもしれないといわれます。現在の工業製品の消費拡大を基盤とした30兆ドル規模の巨大な世界経済の生産方式と使われ方が、私たち人間と地球の運命を握っているようです。では、私たち日本人に何が出来るのでしょうか。



国連人口基金

『世界人口推計 2000 改訂版』より作成

世界の人口の5人に3人はアジア人

## 1. なぜ、地球と人間の安全保障なのか、日本の役割とはなにか

20世紀の最後の世代であり、また21世紀の最初の世代である、

私たちの課題は何なのだろうか。

### 1) 地球規模で抱えている問題

### 2) 私たち日本人の位置と役割

- \* 過去半世紀の間、日本国憲法の下で他国の人を一人も殺していない歴史を誇りとして予防外交を行うこと。
- \* 自然を尊重し、心豊かな生活と多様な地域文化を育みつつ、高度な科学技術によって持続可能な経済活動を進める社会へと移行し、世界のモデルとなる。

## 3. なぜ、今、暮らしなのか

### 1) 地球生態系（生命維持能力）の現状を背景にして

- 工業社会からの移行のために：需要サイドから考える
  - 縦割りの法律や条約の限界—日常生活はトータルで横のつながり
  - 誇りえる日本の資産は何か—食、住、衣服、生活の仕方
  - 日本の再生/創造：国際性と独自性の両立
- 地方の自然の多様性/地方文化の多様性/生活（くらし）の多様性

### 2) 日本の未来像を描き、実行する意味：

人間の生存の基本である「くらし」を再考する意味

## データ

### 1—工業化社会の抱える問題と

しわ寄せを受けている開発途上国

### 2—日本の経済発展の現状と

しわ寄せを受けている子どもや日常生活

### 3—日本の現在の様々な法律、条令

### 4—日本の歴史 1945年—1994年

(産業、金融、貿易、農林、運輸、公害・環境、国際)

資料作成において、藤崎理恵（東京大学工学部都市工学科修士1年）他過去数年の間に折々にデータ整理をしてくれた多くの学生方々の協力を深く感謝。

## はじめに

島国の日本が

今まで暮らしの中で育ててきた生活の知恵と  
世界から学んできた世界の知識と知恵をつむぎ合わせて  
21世紀のくらしの未来像を創造し実践してゆくことは、  
20世紀の最後の世代であり、21世紀の最初の世代である  
私たちの世代の責任であり、また、日本人社会の再生であり、  
宇宙の中の島のような地球に生きる人々への貢献ではないでしょうか

きれいな空気、安全な水や食べ物、心休まる快適な住居、  
心和ませ安らかな気持ちにさせる道筋や町並み、「学び、遊び、笑い、考える」ことを  
支える穏やかな社会環境、そして、恵み豊かな自然環境等を得ることは、  
どこの国においても共通の願いではないでしょうか。

今、あのアフガニスタンの難民や空爆におびえる人々の姿をみたり、  
ニューヨークの犠牲者の家族や周りの人々を見ていて、  
どのような状況でも人々は毎日の基本的な営みは変わらないのだと  
毎日の生活の大切さを感じ、昨年からはじめたこの活動の意味をかみ締めています。

私は、1997年12月に京都で気候変動枠組み条約第三回締約国会議  
(COP3)が開催されて以降、今後の課題は何なのか、いろいろ考えてきました。

というのも、国際的な活動をしましたが、国際条約はいろいろ採択されるけれども、国内でも法律はいろいろ作られるけれども、資源や環境の問題や、社会問題は深刻さを増してきている。今こそ、全く別のアプローチに取り組む時期ではないかと、正面から取り組むべき課題に向かうときが来ていると。

この私たち人間が毎日生きているところに戻って、つまり、衣食住という生活基盤とその周りの生活圏(コミュニティ)のトータルな視点から、社会のあり方、制度のあり方、或いは、産業や企業のあり方、行政や政治のあり方、などを再検討することから、未来の方向を描き実践する時がきたのだと、思い知りました。

生活基盤(衣食住)と生活圏とを総合的に捉えて、今起きている問題を分析し、原因を抽出し、どのように解決してゆくの望ましいのか、このような作業は、始まったばかりです。

## 1. なぜ、地球と人間の安全保障なのか、そして、日本の役割とはなにか

20世紀の最後の世代であり、また21世紀の最初の世代である、私たちの課題は何なのだろうか。

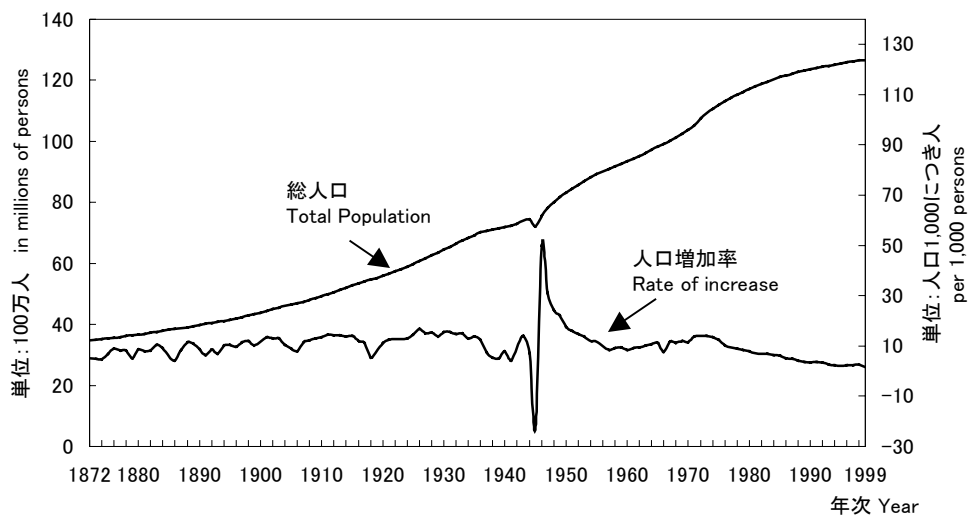


図1 日本の人口の推移 (1872-1999)

### 1) 地球規模で抱えている問題

20世紀末に展開された経済のグローバル化は人々に多くの利益をもたらしたが、しかし一方で、トレードオフとして、富の極端な偏在化と地球環境問題の深刻化をもたらしている。

### 世界の現状

最新版の2001年度「世界人口白書」によれば、現在の世界人口は61億3400万人であり、2050年には推計93億人に達すると発表された。この人口増加はアフリカやアジア等の開発途上国に集中しており、50年後には世界人口の85%以上をこれらの国に人々で占められるという。

世界の総消費支出額は1995年時点で、約21兆ドルに達し、20年間で倍に増大している。その一方で、世界人口の20%の最も豊かな層が個人消費総額の86%を独占し、ている。

20%の最も貧しい層は1.3%しか消費できず、約12億人が一日1ドル以下の「極度の貧困」の中で暮らし、途上国の三人に一人は清潔な水を利用できない状態である。

### 途上国が抱える問題

UNDP『Human Development Report 2001』によれば

- 健康状態：\* 9億8600万人—安全な水を利用できない人々（1998）  
\* 24億人—基本的な衛生状態を受ることができない人々（1998）  
\* 3400万人—HIV/AIDSに罹っている人々（2000末）  
\* 2200万人—年に室内大気汚染で死亡する人々（1996）
- 教育状態：\* 8億5400万人—読み書きができない人々（2000）  
5億4300万人—その内女性  
\* 3億2500万人—初等／中等教育レベルの学校に行けない子供  
1億8300万人—その内女の子（2000）
- 所得貧困：12億人—1ドル以下の生活をする人々（1998）  
28億人—2ドル以下の生活をする人々（1998）
- 子ども：1億6300万人—体重が標準に達しない5歳以下の子ども（1998）  
1100万人—年に予防可能な病気で5歳以内で死亡する子ども（1998）

### OECD諸国が抱える問題

- 15%—実用可能な読み書きに不自由な大人（1998）  
1億3000万人—貧困所得（1999）  
800万人—栄養不足の状態（1996—8）  
150万人—HIV/AIDSに罹っている（2000）

### 資源と環境問題

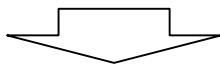
人口の増加、人口移動、持続不可能な消費・生産活動によって、大気汚染が一層進み、気候変動問題が加速し、大規模な森林伐採や土地開発によって動植物の多くの種が絶滅し、生態系の劣化が加速している。水資源の不足が懸念され、土壌劣化は食糧の生産能力を低下させるなど、人口の増加に対して対応が出来なくなる状態がくる。

きれいな水、安定した気候、エネルギー、食用穀物などを生み出す生態系に人間の生活は依存している。現在のような経済活動のあり方を続けていけば、生態系の能力はほぼ確実に低下していき、取り返しのつかない損失を与えることになる。

（『世界の資源と環境 2000-2001』WRI,UNDP,UNEP, 世界銀行共編、日経 BP 社）  
全人類が欧米人や日本人のような生活をするに地球があと二つ必要であるという。

（『WWF International Report』 2000.10.20）

以上のように、地球規模で「もてる者」と「もてない者」との格差が広がるにつれ、摩擦が激しくなり、更に、多様な自然に適応した多様な歴史文化や生活様式がともに壊れつつあり、その結果として人々の心の安寧が壊れてきている。それはまた、社会や政情の不安定化を導く事になる。地球規模での人間の心の不安定化が起きている。



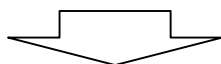
## 世界規模の課題

世界規模の課題として、1992年に採択された気候変動枠組み条約や生物多様性条約の更なる進展への努力はいうまでもない。他の条約とのリンケージを強めることで有効な効果の達成は当然必要なことである。さらに、上述のような世界の現状を考慮して、WSSDに向けての様々な会議や活動を通じて、2002年以降の地球規模の具体的な課題と行動計画が議論されることになるだろう。

世界人口白書はこれらの問題に対し、地球規模で、総合的に取り組まないと持続可能な発展は達成できないと報告している。

工業先進国と途上国とでは対応方法は異なる

工業先進国にいるわれわれ日本人は消費者として、あるいは企業人として、様々な意思決定をしているが、それは生態系の運命を左右する意思決定もしていることになる。



賢明な意思決定をおこなうために、日本人の日常生活において様々なレベルで、途上国の人々の抱える問題や、地球の資源と環境の問題に、深くつながっていることを学び、問題解決のためにどのようなことができるのか考え、それを実行に移してゆく時である。

## 2) 私たち日本人の位置と役割

このような世界規模の課題は、日本は責任をどのように果たすのか、また、日本の国や社会の未来像をどのように描くのか、というわれわれ日本人の課題と、不可分な関係にある。

### (1) 日本の位置

- \* 人口が多く、面積が小さい
- \* 世界各国のGDP：日本が世界の第2位
- \* 工業先進国だが、他国の資源・市場に依存

## GDP と輸出入額の急増

- \* 日常生活でも同様に他国に依存（衣食住）



日本は経済においても日常生活においても生態系に負担をかけており、他国の人々の生活に依存かつ圧迫している。

得られた日本の富は、ダム、道路建設等、命のないもの（死んでいるもの）へとその多くが使われている。

人々が、生き生きと生きるために、分配されているようには見えない。

家中が家電製品に埋もれ、歩ける距離で使う自家用自動車、有り余る衣服、コンクリートの街、ゴミにあふれる海浜や山里、余計すぎる騒音、...

食べ物の60%近くが輸入されていながら、食品廃棄物は年間1960万トン（家庭系—1000万トン、流通・外食—960万トン）。

ヨーロッパブランド衣服の総売上額の3分の1は、日本女性。  
エルメスの日本での売上高は、本家をしのぐ。

- 日本経済再考— 大量生産、大量消費、大量廃棄の産業構造の転換の必要性
- 自然や生き物を大規模に消滅させる公共事業の転換の必要性



- \* 日本の中高生の6割は21世紀に希望をもてず、人生目標も、地位や名誉、社会貢献より「楽しんで生きること」を一番に考えている  
(日本青少年研究所、新千年生活と意識に関する国際比較調査,2001)

- \* 「日本の豊かさのむなしさ—20世紀資本主義の勝利の不確実性が、日本ほど鮮明に露出しているところもないが、その不確実性が日本ほど理解されていないところもない。」

『空虚な楽園』,ガバン・マコーマック,1998,みすず書房

- 社会・文化の再創造— 良い伝統を残し、  
未来に向けた生き方（暮らし方）の創造

「くらしの未来像を考え、実行するネットワーク」の意味

- 如何に暮らすかを考えることは、  
如何に生きるかを考えること  
生活の基盤（衣食住）と生活圏（共同体）

## (2) 日本の役割

### 国際社会において

日本の適切な責任の果たし方とは、どうあるべきなのだろうか。工業経済大国である日本に対して、今まで一般的に求められていたのは、資金拠出や、環境に配慮する技術や製品の開発・普及であったようである。しかし、前述の世界規模の課題を考えた時、本当に何が求められていて、われわれに何が可能なのだろうか、改めて考える必要がある。

### 国内において

日本をはじめとする工業先進国における、現在の持続不可能な生産・消費・廃棄の構造は国際的にも途上国における持続不可能な状態の一因にもなっている。その問題を解決するために、日本を「**自然を尊重し、心豊かな生活と多様な地域文化を育みつつ、高度な科学技術によって持続可能な経済活動を進める社会**」へと築いてゆく必要がある。

— 日本の生態系を健全に保つには、総合的なエコシステム管理 (integrated ecosystem management)、即ち、適正な規模での地域の経済政策と自然の保全政策が相互に統合され、地域におけるあらゆる住民、NGO、企業、行政、研究者などのアクターの連携によって、経済発展が進められるとともに、自然資源の適正な保全と管理が求められる。

— 過剰消費の生活様式を転換し、環境負荷の小さい財・サービスを求める消費者が育ち、NPO/NGO やメディア、科学者や研究者が、企業・製造者や政府に働きかけることで、生産者は消費者の望むものを提供し、行政と政治はそうした動きを促進する枠組みを提供する。あらゆる主体が健全に効果的な連携を結びながら行動し実践する社会をいかに築いていくかが、日本のもうひとつの課題である。

## 3) 日本が新たな道を進むための基本的な考え方

### \* ヒトの「こども」として

「私たちは動物として生まれ、文化的な適応を通してのみ人間になるのです。その際に非常に重要なのは、幼児期の養育です。どんな貧しい養育にも人間愛という要素が、たとえ目には見えなくても、ほんのわずかしか現れていなくても確かに存在しているのです。人間の魂は、慈しみ育て触れ合う中に、壁のない育児の場に、すなわち、幼児の依存性を支え育む腕の中に、生まれるのです。」

イディス・コップ「哲学と子どもの健康」『自然への共鳴』1990年

思索社 p107

「 コップがみつめたものは、まさにそのような想像力的情念が生まれ育つ子ども時代の環境全体だったのである。ヒトとして生まれ、身体という知覚劇場の中で構成され創り上げられる想像の世界は、ひとり一人の子供がそうありたいと愛し、あこがれ、意図するものが反映するのである。そして、子どもはそれを大人になって現実化させようとして生きるのである。その想像の世界は、文化の発展にとって建設的で創造的なものばかりでなく、逆に、破壊的な場合があり、それが非常に問題なのである。」

黒坂「解説」、イデイス・コップ『イマジネーションの生態学—子供時代における自然との詩的共感』 思索社 1986年 p212

### \* 個性として

「 人間の個性は、夢や情熱にこそあるのではなかろうか？ そして、この個性ある夢や情熱が、その人間特有のすばらしい才能を創り上げるのだと思うのである。男性の才能というものは、男性特有の夢や情熱が創り上げたものにちがいない。このことは女性についてもいえるのではないだろうか、女性は道具を通じて自己を拡張しようという情熱に関して、あるいは男性に劣るかもしれない。

しかし、人間として生きる真摯さ、人間に対する好奇心の深さにおいて、常に男性と対等に生きる能力をもっているように、私は思うのである。」

村上益子『女の可能性』 亜紀書房 1978年 p242-243

### \*人間として

「 私たちは、キーツのやさしく情のこもった一節、「多くの人、それと知らずして詩人なのである」という表現を借用して、多くの人、今はそれと知らずしてまた気づかずしてエコロジストなのであると、言う事にしよう。ひとつは詩的、もうひとつはエコロジカルであるこれらの二つの表現は、関係がないわけではない。なぜなら、両者とも、何千年もの歳月をかけて真の隠喩を探し求めてきた

「考える葦」としての人間に関する真実だからである。

農夫であれ、漁師であれ、猟師や、自然科学者や、詩人や、探検家であれ、あらゆる人々が、知覚したことを言語へ変換するという達成のために、即ち、精神と自然との隠喩的關係を表現するために、組織の様々な段階においても、また、詩的な観点からも、自然の動態をエコロジカルに読み取ってこなければならなかったのである。」

イデイス・コップ『イマジネーションの生態学—子供時代における自然との詩的共感』 思索社 1986年 p32-33

「ある程度までは、愛さえあれば、即ち、人間の本質を愛する心があれば、倫理的知性は個人の内面でより高い次元へと広がり、高まる可能性はあります。

しかし、人間の生において、環境との関係がより豊かでより創造的であるためには、世界像の中に人間性だけでなく、自然が含まれていなければなりません。このような理解に達するかどうかは、制御された感情移入の力があるか否かの問題であり、、同一化の問題なのです、、、

「社会的意識は、愛の申し子」なのです。そして、想像力は、あらゆるものに生命を吹き込み、自然の中のあらゆるものを人格化する社会感覚です。そして、崇高さを求めるその探求には終わりはありません。、、

社会的意識は、第一に、こどもに対する愛情と保護と教育の成果であり、他の人のために尽くそうという社会制度はすべて、人間の著しく長い幼児期に必要とされる行為、即ち、慈しみ育てるという行為の本質から発達してののだと。

文化的に、社会的にこどもに対してどのような態度をとるかが、私たちの人間性と運命を決定するのだといえるようです。」

イデイス・コップ「哲学と子どもの健康」『自然への共鳴』1990年

思索社 p104-105

## \* 日本人として

「ルイス・マンホードは、「分化は、人間のありのままの過去と現在だけでなく人間がそうありたいと愛し、憧れ、意図するものを含んでいる」と考えて文化史を描いている。訳者の久野収は、このようなマンホードの視点について、「こうして物的対象や記録として残りやすい労働や機械の効率的使用や実践的知性の発展に目配りを加えると同時に、遊びや言語の表現的使用や、この表現的使用にハケロを求める想像力的情念にの方にも同じような目配りを加えなければ、文化史の描き出しはうまくいかない」と解説する。」

黒坂「解説」、イデイス・コップ『イマジネーションの生態学—子供時代における自然との詩的共感』 思索社 1986年 p212

「日本の1960年代とは、経済成長が急成長し、都市の再建と拡張が急速に進んだ時代である。敗戦後の瓦礫の山からの奇跡的な復興、1950年代を死に物狂いで走り続けた日本が、そのエネルギーを初めて自分の内側に向けられるようになった時代だった。無論、生活水準自体は現在ほど裕福ではなく、決して満たされているとはいえなかった。しかし、人々には、満たされないその思いを何かにつけようとする意欲や情熱があった。何も無いところから這い上がる、その闘いの緊張の中だったからこそ、より深くより遠くまで思考を及ぼし得る精神的強さがあったといえるだろう。

日本における創造的な仕事の系譜を辿ってみても、この時期のものは確かな  
＜個人＞の意志が強烈に感じられる。しかもそれが決して内に閉じてはいない。  
さまざまなものと関わりの中でなされているのである。

情報は力である。しかし、その力を社会と結びつけ、新しい価値観創造へと組  
み立てあげていくのは、人間の構想力、構築力をおいてほかにはあり得ない。どれ  
だけ時代がかわろうとも、このことには変わらないだろう。しかもそれは決して体  
系的に数量化できるものではない、身体性と深く結びついたアナログ的な思考過程  
によるものだ。だからこそ、生きていくことに緊張感があつた時代の日本人は強か  
つたのである。」

『連戦敗戦』 安藤忠雄 東京大学出版会 2001年 p8-9

「人間と自然との関係が崩れるとき、人間と人間との関係が崩れるとき、  
非常に破壊的で切迫した色調をおびるのである。

環境が崩壊し、鋼鉄とコンクリートが大地にとって代わるとき、精神(スピリッツ)  
もまた崩れ去るだろう。精神(スピリッツ)の要素がなければ、人間は、  
知性のずるさをとどめるまったくの動物になってしまうだろう。」

イデイス・コップ『イマジネーションの生態学—子供時代における自然との詩的共感』  
思索社 1986年 p106

「ポール・シェパードは、環境と人間の精神とは、相互関係にあることを認める。  
そして、近代の工業化社会がもたらした大規模で、急激な環境破壊は、人間が成熟  
化に失敗したところから生じたと述べる。西洋文明の集団的志向の基本概念である  
自然と人間の分離思考から発達した工業化社会は、人間の成熟化を妨げ、幼児化を  
促していると解く。

このような社会では、人間は自己中心的であり、他人とつながることができず、  
自然とのつながりをなくしていくため、環境破壊は促進されるという。」

黒坂「解説」、イデイス・コップ『イマジネーションの生態学—子  
供時代における自然との詩的共感』 思索社 1986年 p217

「私たちの真の創造性は、絶え間ない再生への欲求から、つまり、物質交代のよう  
に環境から精神へと燃焼の力が補給されてゆくことから、生まれるものなのです。  
新しい目標を達成したり、あたらしいものを創り出す私たちの能力は、反応の柔軟性  
を保持する能力に由来するのです。そして、世界を創る時に発揮される独創力は、  
人間の著しく長い子供時代が人類にもたらした贈り物なのです。」

イデイス・コップ「哲学と子どもの健康」『自然への共鳴』1989年 思索社  
p106-107

「欧米とは異なる歴史と文化をもつ日本は工業化社会として急成長し、欧米の工業化社会で生じている危機と似たような問題に直面している。しかし、危機としての現象は同じでも、その解決への方法は、日本の歴史と文化をふまえたものでなければならぬと、私は思う。

しかし、その際に、コップが述べるように、「建設的な文化の発展とは、世界及び同胞の人々への態度と情緒とを改めるような人間と環境との豊富化である」という認識と、個性の豊かさが共感をともなった謙虚な知性へと向かう個人の能力からのみ評価されるという認識は、普遍であると思う。又、文化の段階においても、個人のそれにおいても、謙虚さを創造的な道具とする認識は、文化・歴史の違いを越えて共通なのである。」

黒坂「解説」、イデイス・コップ『イマジネーションの生態学—子供時代における自然との詩的共感』 思索社 1986年 p216

過去に日本は世界から「学ぶ」ことのみを行い、また、多くの人々の「いのち」を奪ったばかりでなく、他地域から自然資源や食糧を得ることを続けてきた。その結果、「空虚な富」を得た。逆にいえば、それは、世界からの借金とも言える。

今までの多くの「師」の恩に感謝し、多くの「命」の冥福を祈りつつ、世界に返して行く時がきている。

どのように返すのが適切なのだろうか。

もし、日本が、私たちが、自然を尊重するような、多様な地域文化を育むような、しかも、こころ豊かな生活—一人一人が生き生きと生きるのを支える生活—を創造し、高度な科学技術を生かしつつ持続可能な経済活動を可能とする社会を創りあげることができるならば、それこそが、日本ができる世界への貢献ではないだろうか。